



- 知多半島生態系ネットワーク協議会
- 東部丘陵生態系ネットワーク協議会
- 西三河生態系ネットワーク協議会
- 尾張北部生態系ネットワーク協議会
- 新城設楽生態系ネットワーク協議会
- 東三河生態系ネットワーク協議会
- 渥美半島生態系ネットワーク協議会
- 西三河南部生態系ネットワーク協議会
- 尾張西部生態系ネットワーク協議会



自然の恵みに支えられた暮らしを守り、創出する

あいち生態系ネットワーク協議会レポート

Report of Ecological Network Councils in Aichi



はじめに

2010年(平成22年)に本県で開催された生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)では、生物多様性保全に関する2020年に向けた世界目標として「愛知目標」(Aichi Biodiversity Targets)が採択されました。

本県では、愛知目標の達成に向け、2013年(平成25年)3月、「あいち生物多様性戦略2020」を策定し、「人と自然が共生するあいち」を目指して、様々な取組を行っています。その中心となるのが、地域の多様な主体が共通の目標を持ち、連携・協働することで、生きものの生息・生育空間のつながりを保全・再生する「生態系ネットワークの形成」です。

その実現のため、県では、県内9つの地域ごとに、大学やNPO、企業、行政等からなる「生態系ネットワーク協議会」の設立を進めてきましたが、昨年11月、9番目となる「尾張西部生態系ネットワーク協議会」の設立をもって、全県をカバーする体制が整いました。今後、9つの協議会がそれぞれに工夫を凝らすとともに、その経験や成果を共有することで、多様な主体の協働による生態系ネットワークの形成をさらに有効に進めていただく必要があると考えております。

また、県では、昨年8月に生物多様性保全に積極的に取り組む海外のサブナショナル政府(州・県レベルの広域自治体)と「愛知目標達成に向けた国際先進広域自治体連合」を設立し、同年12月にメキシコ・カンクンで開催されたCOP13において、世界のサブナショナル政府の取組の活性化を促す共同アピールを行いました。この活動を通じて、生物多様性の保全を進めていく上では、地域の多様な主体の連携が不可欠であることを改めて実感しました。

この小冊子は、県の生態系ネットワークの取組や9つの協議会の概要を分かりやすく取りまとめたものです。各協議会の活動や協議会間の連携の参考にさせていただくとともに、より多くの県民の皆様に生態系ネットワークの取組に加わっていただくため、お役に立てば幸いです。

平成29年1月28日
愛知県知事
大村秀章



02 生態系ネットワーク協議会について

04

ごんぎつねと住める知多半島を創ろう

知多半島生態系ネットワーク協議会

06

23大学が先導する、ギフチョウやトンボの舞うまちづくり

東部丘陵生態系ネットワーク協議会

08

最先端のものづくりと最先端のエコロジーが好循環する暮らしを目指して

西三河生態系ネットワーク協議会

10

《うらやま》の豊かな自然を再発見しよう

尾張北部生態系ネットワーク協議会

12

樹を活かす、地域を活かす、森のちからと人の営みが調和する奥三河

新城設楽生態系ネットワーク協議会

14

穂の国いきものがたり 子どもたちへ水と緑でつなげよう

東三河生態系ネットワーク協議会

16

海と大地の恵みを活かし、人と自然を未来につなぐ渥美半島の創造

渥美半島生態系ネットワーク協議会

18

きらきら光る^{あお}碧い海～西三河沿岸が育む生きものたちのつながり～

西三河南部生態系ネットワーク協議会

20

サギやケリの舞う^{いひも}生命豊かな尾張平野をめざして

尾張西部生態系ネットワーク協議会

22 生態系ネットワーク協議会 構成団体一覧

24 用語の解説

生態系ネットワーク協議会について

1 COP10と「愛知目標」

2010年の秋に「いのちの共生を未来に」をテーマに、愛知・名古屋で「生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)」が開催され、生物多様性の保全と持続可能な利用を進めていくための世界目標として「愛知目標(Aichi Biodiversity Targets)」が採択されました。

「愛知目標」は、2020年に向けた具体的な行動計画であり、20の個別目標からなっています。また、国連総会において2011年から2020年までの10年間で「国連生物多様性の10年」とし、「愛知目標」の達成に向けて国際社会のあらゆる主体が連携して生物多様性の問題に取り組むことが決定されました。本県はCOP10の開催地としてふさわしい取組を積極的に推進していくとともに、国際的にもリーダーシップをとって「愛知目標」の達成に貢献していく必要があります。

<20の個別目標>

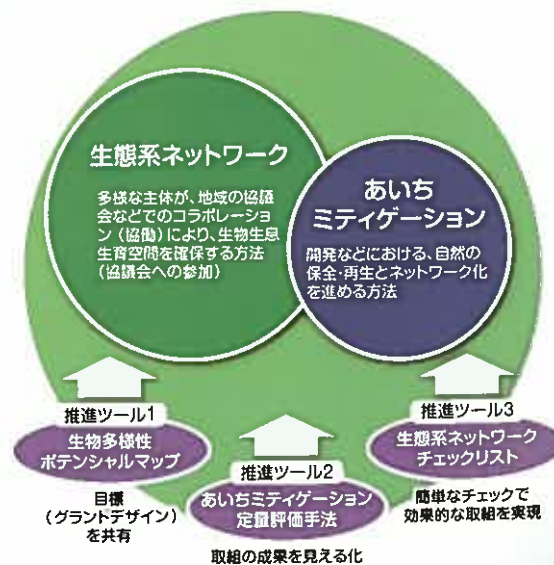
戦略目標	個別目標(項目)	戦略目標	個別目標(項目)
A 根本的要因への取組	1 普及啓発	C 状況の維持・改善	11 保護地域
	2 各種計画への組み込み		12 種の保全
	3 補助金・奨励措置		13 遺伝的多様性
	4 生産と消費		14 生態系サービス
B 直接的要因への取組	5 生息地の破壊	D 自然の恵みの強化	15 復元と気候変動対策
	6 過剰漁獲		16 ABS※
	7 農業・林業・養殖業		E 実施の強化
	8 化学汚染	18 伝統的知識	
	9 外来種	19 知識・技術の向上と普及	
	10 環境変化に弱い生態系の保護	20 人材・資金	

※ABS: 遺伝資源へのアクセスとその利用から生ずる利益の公正かつ衡平な配分のこと。

2 「あいち生物多様性戦略2020」と「あいち方式」

「愛知目標」を踏まえて、2013年3月に策定した「あいち生物多様性戦略2020」では、「人と自然が共生するあいち」を基本目標に掲げ、「生態系ネットワークの形成」を進めるための新しい仕組み「あいち方式」を重点的に推進していくこととしています。

「あいち方式」とは、県民やNPO、事業者、行政といった地域の多様な主体が共通の目標のもとにコラボレーション(協働)しながら、効果的な場所で生物の生息・生育空間の保全・創出の取組を行うことにより、生物多様性への意識を高め、人と人のつながりを育みながら「生態系ネットワーク」の形成を進め、「人と自然が共生するあいち」を実現する仕組みです。



3 生態系ネットワークの形成 ～生態系ネットワーク協議会～

「生態系ネットワーク」とは

野生生物の多くは、ひとつのタイプの自然で一生涯を完結しているだけでなく、複数の異なるタイプの自然を利用しています。たとえば、ニホンアカガエルは、卵・オタマジャクシの時は、田んぼや湿地などで、子ガエルは草地で、親ガエルは林で生活しています。

また、ある生物の集団が孤立すると遺伝的な多様性が失われてしまうため、他の集団との繁殖交流をするために、移動できる範囲内に同じタイプの自然が複数存在している必要があります。さらに、ある生物の生息・生育に適した自然がなくなってしまう場合でも、その生物が移動できる範囲内に同じタイプの自然があれば、その地域から絶滅する危険を減らすことができます。

このように、生物多様性を守っていくためには、同じタイプの自然や、異なるタイプの自然がネットワークされている必要があります。これを「生態系ネットワーク」と呼びます。

経済活動が活発な現在、市街化が進み、生物がすみ場所が減少しています。そこで、県では、土地利用の転換や開発などによって生態系が分断・孤立した自然を保全・再生してつなげ、生態系を回復する「生態系ネットワークの形成」を県内全域で取り組むこととしました。

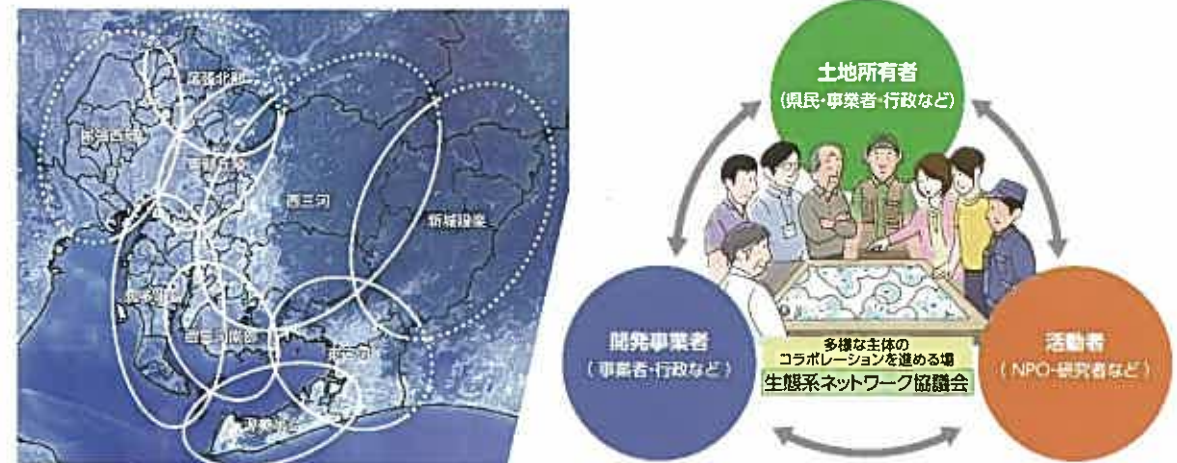


「生態系ネットワーク協議会」とは

県では、自然や社会の特徴に応じて県域を9地域に区分し、地域ごとに多様な主体で構成された生態系ネットワーク協議会(以下、「協議会」という。)の設立を進めてきました。

各地域で設立された協議会は、地域特性を踏まえて独自性のある取組を展開しています。そのため、取組方針や取組方法、構成団体に至るまで、協議会ごとに様々です。

協議会の取組方針を特徴づけるものが、取組テーマであり、地域の独自性を反映させた内容となっています。構成団体は、大学、NPO、企業、行政等ですが、そのバランスは協議会ごとに異なっています。次ページ以降、設立順に県内9協議会のプロフィールを紹介します。



知多半島

生態系ネットワーク協議会

事例を積みかさね
自然をつなぎ
生きものとともに暮らす



抵抗性マツの植樹

取組のヒントになるアイデアや事例を重ねる

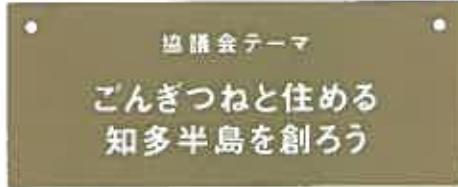
同協議会には大学、企業、NPO、行政がバランスよく所属しており、困ったことがあれば、さまざまな分野の専門家が助けてくれます。福田秀志会長（日本福祉大学教授）は「地球温暖化や廃棄物と異なり、生物多様性※1の取組は数値で表しにくく、多くの団体から何をしたらよいかかわらないと相談を受けます。私たちは限られた予算のなかでアイデアを出し、モデル事業を少しずつ積み重ねて発信することで、生物多様性の活動のヒントにしていきたいと思っています」と活動の方針を語っています。

Chita Peninsula

半田市、常滑市、東海市、大府市、知多市、阿久比町、東浦町、南知多町、美浜町、武豊町

知多半島生態系ネットワーク協議会は、平成23年1月に設立され、知多半島の将来のイメージや計画がつけられました。メンバーの36団体（平成28年10月現在）が、生物多様性の保全や創出などのモデル事業のアイデアを実行し、生物多様性の活動のヒントとなる事例を発信しています。

本文中、※のついた用語の解説は、P24にあります。



フリーペーパー「エコレコあいち」

さまざまなモデル事業を展開し、活動のヒントを広く発信

知多半島の北部には大きな森がなく、同協議会では臨海部の企業やNPO、学生による「命をつなぐPROJECT」において臨海工業地帯におけるビオトープ※2づくりやその緩衝緑地における外来種※3から在来種※4への樹種入れ替えなどを行い、活動内容をフリーペーパー「ecoReco aichi」で発信しています。また、半島中部では「東浦自然環境学習の森」と企業緑地などの周辺の緑地をつないでキツネが安全に移動できるエコロジカルコリドー※5をつくらうとしています。さらに、半島南部では大量の松枯れが発生して美浜町の町木であるクロマツが壊滅状態にあるため、松枯れ跡地に抵抗性マツ※6を植えて緑をつないでいます。



キツネ
日本福祉大学
福田研究室提供



シラタマホシクサ
(公財)日本生態系協会提供



カワウ
日本福祉大学
福田研究室提供



ベンケイガニ
(公財)日本生態系協会提供



東浦自然環境学習の森

生態系を知らない若者でも気軽に参加できる場をつくりたい

「北部の活動を主に担っている『命をつなぐプロジェクト』には、当初は環境にあまり縁のない文系の学生が多く参加していましたが、最近は環境系の学生が多いように思います。どちらも意味があると思いますし、学生にとっては普段出会えない企業や行政に会えるので、気軽に参加してほしいですね」と福田会長は呼びかけています。

また、平成27年に県が主催した「あいち生物多様性フォーラム」では、西三河および新城設楽の生態系ネットワーク協議会と共同で、一般市民や生物多様性自治体ネットワーク幹事自治体、環境省など175人の参加者に対して成果を発表しました。今後も他の協議会との連携を進めたいそうです。



臨海部の緑地帯

真に生態系をつなぐために協議会にできることは?

同協議会は今後も「北部ではビオトープづくりを計画的に行い、南部では急速に拡大する竹林を伐採して有効利用していきます。また、南部に数多くあるため池の再生にも取り組みたいと考えています」（福田会長）。

また、福田会長は「実際に生態系※7をつなぐには莫大な費用がかかりますので、道路建設などの大規模な公共事業の際に、あわせて生物多様性の保全や創出を行うのが現実的だと思います。そのために私たちのアイデアや事例をぜひ生かしていただきたい。公共事業と私たちの取組をつなぐ役割が今後必要ではないでしょうか」と先を見据えています。

シンボルとなる生きもの

キツネ、シラタマホシクサ、ベンケイガニの仲間、カワウ



抵抗性マツの植樹



出光興産愛知製油所のビオトープ

おもな活動

- ・臨海工業地帯の緑地整備
- ・東浦自然環境学習の森におけるキツネの生息に適した環境の維持・整備
- ・板山高根・寺町田湿地における湿地植物の保護・育成
- ・半島南部におけるモウソウチク対策・松枯れ対策

東部丘陵

生態系ネットワーク協議会

生態系をつなぐために
みずから考え
行動する人を育てる



金城学院大学内の炭焼小屋

都市に浮かぶ島をつなげて緑地や湿地、生きものを守る

このエリアは東海丘陵要素植物群※8などの独自の生物多様性※1をもつ一方で、都市化が進み、緑地や湿地の減少や外来種※3の増加といった問題も抱えています。同協議会は、都市部に隣接した里山や大学キャンパス、企業の緑地など、“都市に浮かぶ島”のような生態系※7をつなぐことを目的としています。肘井直樹会長（名古屋大学教授）は「38団体（平成28年10月現在）のうち23団体が大学であり、大学が中心となって活動を進めています。地元の人々の方々の地域の生態系保全への関心もとても高いですね」と語ります。

Eastern Hills

名古屋市、瀬戸市、春日井市、豊田市、尾張旭市、豊明市、日進市、みよし市、長久手市、東郷町

東部丘陵生態系ネットワーク協議会は平成23年3月に設立されました。大学が中心となって、住民や事業者、行政と協力しながら、ハード的な（実際に生態系をつないでいくための）取組とソフト的な（所属団体が知恵を出し合う）取組の両面からモデル事業を進めています。本文中、※のついた用語の解説は、P24にあります。

協議会テーマ
23大学が先導する、ギフチョウやトンボの舞うまちづくり



あいち自然再生カレッジ

何度も足を運びたいくなる「あいち自然再生カレッジ」

メンバーの愛知学院大学、愛知工業大学、愛知学泉大学などでビオトープ※2の設置・整備が進められ、その他の大学でもキャンパス内の自然の保全活動や、自然を生かした環境教育が展開されています。

また同協議会は一般市民を対象に、生物多様性を学び、保全のために行動する人を育てることを目的として、大学が連携したリレー講義「あいち自然再生カレッジ」を年に5回開催。地域住民、NPOや学生、行政の担当者等の方々が参加して、生物多様性とは何かについて、また東海丘陵要素植物群や外来種問題等について学んでいます。近年では若者の参加者も増え、リーダーも多いそうです。



シンボルとなる生きもの

シデコブシ、ギフチョウ、ハッチョウトンボ、シラタマホシクサ



「海上の森センター」での活動



あいち自然再生カレッジ



八竜湿地

子どもから大人まで楽しめるシンボリックな施設を

肘井会長は「自然環境や生物多様性に興味のない人たちが、関心をもつきっかけを作りたいですね」と抱負を語っています。そして「そのために最適なのは、子どもも楽しめる、博物館のような恒常的な中核施設ではないかと考えています。幸いこのエリアには、『海上の森センター』があり、しかも駅から歩いて行ける立地にあります。センターに専門職員が常駐し、研究やガイド、イベント企画を行うとともに、協議会のコーディネーターや窓口も務めることができれば、協議会の課題である人手不足の問題も解消できるのではないのでしょうか」と提案しています。

生態系をつなぐための人材を育てていきたい

また、肘井会長は「土地開発の際の代償ミティゲーション※9や生態系の島をつなぐためのコリドー※10の設置は、現実には土地や費用の面から難しいこともあります」と分析。「それでもまず、つないでいく必要性と正しい知識を県民に伝え、若者や子どもにも裾野を広げていきたい。また、違った視点から考えることも重要です。例えば、どうしても守りたい絶滅危惧種があるとして、でもそれを守ることで他の種が絶滅することもあり得るわけです。そういった広い視野で生物多様性をとらえて考え、行動できる人材を育てていけたら」と方針を語っています。

「海上の森センター」での活動

おもな活動

- ・あいち自然再生カレッジ
- ・キャンパス内ビオトープの整備
- ・東部丘陵生態系ネットワーク形成フォーラム
- ・里山や湧水湿地の保全

西三河

最先端のものづくりと
豊かな自然の
共生を目指して



ソニーの森「フクロウの住む森づくり」

ものづくりのメッカと 環境との両立

西三河は、里山や田園といった多様性に富んだ環境を持ちつつ、国内有数の産業集積地でもあります。西三河生態系ネットワーク協議会では、工場敷地内の既存の緑地を改善して生きものが生息しやすい環境をつくったり、新たに生きものの生息に適した森や草地・水辺を創出したりする取組を行っています。

涌井史郎会長（中部大学客員教授）は、この地域について「ものづくり産業のメッカとして長きにわたって世界をリードしてきた先進技術は、環境負荷をいかに低く抑えるかという点でも世界をリードすべき」と語ります。

Nishi-Mikawa

岡崎市、刈谷市、豊田市、安城市、
知立市、みよし市、幸田町

西三河生態系ネットワーク協議会は、平成23年3月に設立され、29団体(平成28年10月現在)が活動しています。ものづくり県・愛知をけん引する多くの工場・事業所が立地するエリアですが、事業所敷地内の緑地を生きものが生息しやすい環境に改善するなど、自然との共生を目指して、様々な取組が行われています。

本文中、※のついた用語の解説は、P24にあります。

協議会テーマ

最先端のものづくりと
最先端のエコロジーが
好循環する暮らしを目指して



地域在来種の苗木の里親募集

企業、地域住民、行政が 一体となって取り組む

同協議会では、これまで工場建設前から残されている「ソニーの森」で採った在来種※4の種子から地域の住民が苗を育て、地域の緑化に活用する活動や、生活協同組合コープあいちの組合員がオーナーとなり、自然と共生した米づくりを行う「オーナー制による里山の田んぼ保全」などに取り組んできました。

そのほか、地域内の大規模工場各社にビオトープ※2を整備することで街中に生きものを呼び込み、市街地の自然の質を高める活動や、高速道路と一体的に自然を保全・再生し、生態系ネットワーク間のつながりを強化する活動など、企業、地域住民、行政などが一体となって、環境保全に取り組んでいます。



シンボルとなる生きもの

サシバ、オオタカ、
フクロウ、トンボ類、
アカガエル、
カヤネズミ



池もみ



トヨタの森



里山の田んぼ保全

地球的視野に立ち ローカルな生態系維持を

経済発展と環境保全の両立は、ものづくりの盛んなこの地域にとっても大きな課題です。「持続的な生態系※7の尊重と、環境的な質の高さを維持しつつ、その上で地域のものづくり産業がさらに発展して行くような地域社会の構築を目指したい」と涌井会長は語ります。

「企業の環境取組は、これまでのCSR（社会貢献活動）からCSV（共通価値の創造）への転換が迫られています」（涌井会長）。すなわち、企業活動のあらゆる場面での環境負荷軽減はもちろん、本業を通していかに環境に貢献していくかが重要となっているのです。さらに「地球的視野に立った環境取組と、ローカルな生態系維持の両立が求められています」。



刈谷ふれ愛パーク

共通の課題と個々の課題 両方を認識することが大切

県内9つの協議会それぞれが独自の地域特性を持ち、さまざまな課題を抱えています。9つの協議会がいかに連携し、協力していけばいいのでしょうか。「それぞれが共通する課題を認識しつつ、個々の抱えるテーマを整理していくことが大切。東海丘陵湧水湿地群など、愛知県ならではの湿地の多さをいかに活用するか。夏暑く、冬寒い独特の気候が育む生物多様性※1をいかに維持していくかなど、地域の特性に見合った生物多様性の維持が必要です」（涌井会長）。

世界のものづくり拠点といえる西三河地区が、生物多様性や環境取組の面でも世界をけん引していこうとしています。

おもな活動

- ・経済活動を推進力とした里山や田園環境の保全
- ・高速道路や川を回廊とした生態系ネットワークの形成
- ・グリーンエコツーリズムの展開

尾張北部

生態系
ネットワーク
協議会

まちと山をつなぐ
自然を守り、育て
《うらやま》の



犬山里山学センター

まちと山のつなぎ目の役割 体験や広報で住民の意識を高める

尾張北部地域は湿地が多く、東海丘陵要素植物群※8が分布しており、生物多様性※1の高いエリアであり、市街地がすぐそばにあるため自然にふれ合う条件に恵まれています。そのため、親子をはじめ市民の方々がさまざまな活動に参加しています。林進会長（犬山里山学研究所理事長）は活動に対する思いをこう語っています。「まちと山のつなぎ目であるこのエリアは、近年、開発圧力が低下していますが、人の関わりが薄くなった場所では外来種※3による影響が懸念されています。愛知県では希少になってしまった生きものがこの地域ではまだ普通に見られるので、市民の意識を《うらやま》に向けてもらい、活動を通して守り続けていく仕組みをつくっていききたいです」。

North Owari

瀬戸市、春日井市、
犬山市、小牧市

まちのすぐそばの森《うらやま》の自然価値を高めるためには、人の手を入れる必要があります。この森は濃尾平野の上流に位置し、下流部の洪水を防ぐなど、人々の暮らしを守っています。尾張北部生態系ネットワーク協議会は、もう一度自分たちの自然がまちのすぐそばにあることに気付いてもらうため《うらやま》の活動に取り組んでいます。

本文中、※のついた用語の解説は、P24にあります。

協議会テーマ

《うらやま》の豊かな
自然を再発見しよう



池干し

研究と環境学習を織り交ぜ、 地域住民にアピール

このエリアには、遊水池、ため池、その下流に独特の水田生態系※11がありますが、ブルーギルやオオクチバスなどにより、二枚貝やカワバタモロコなどの在来種※4が駆逐されてしまっています。その対策として同協議会は定期的に池干しをして、増えすぎた外来種を駆除する活動を行っています。一度棲みついた外来種を完全に駆除することはできませんが、過剰に外来種が増えた状態を適正と考えられる水準に戻すことができます。池干しには、有志を募集し、市民参加型の環境教育の場として活用して地域住民にアピールしています。それと同時に、協議会構成員のみならず、他団体からの参加も受け入れ、ノウハウの共有化を図っています。実施結果は研究報告に取りまとめ、行政とも成果を共有しています。



ホトケドジョウ

カワバタモロコ

ギフチョウ(♀)

ヒメタイコウチ



昆虫教室

活動を通して人を育て続けていく

活動を継続するためには人材育成が不可欠です。より活動の幅を広げ、規模を拡大するためには新たな仲間が必要となります。この課題に対し林会長は「協議会のスタッフは高齢化していますが、そもそも若手の人材を求めていますし、それは親子参加の事業を継続していくことで人材を育成し続けている成果だと思います。市民の意識は高いと思います」と語っています。愛・地球博の開催エリアということで、市民の意識がもともと高いこともありますが、日頃からの取組を広くアピールし、継続的に仲間を集めていくことが人材育成のポイントかもしれません。

教えるより体験を大切にしたい

今後について、同協議会は「取り組んできた経験を他の協議会と共有し、伝えていきたいと思っています。相互に人材交流をして留学のように他地域の経験を持ち帰るような仕組みがあってもいいですね」(林会長)と展望しています。経験を重視するのは、子どもたちに対する環境教育でも同じです。人気の高い昆虫教室では、昆虫採集をし、捕まえた生きものを図鑑で調べ、標本にまでしています。子どもたちは内発的に興味・関心を持ち、一生懸命に取り組むそうです。将来、さらに多くの方に《うらやま》に関わっていただくために、食やふるさとのものづくりなどでアピールし、《うらやま》を訪れてもらう機会を増やしていく方針です。

シンボルとなる生きもの

ギフチョウ、
カワバタモロコ、
ホトケドジョウ、
ヒメタイコウチ



昆虫教室



蒲原野での湿地基盤整備

おもな活動

- ・市民参加による池干し
- ・社寺林と社寺林をつなぐ緑の道の創出
- ・教育機関、公共施設におけるビオトープの創出
- ・地域住民の協力によるニュータウン内の樹木構成の改善
- ・里山林の再生
- ・竹林の管理
- ・耕作放棄水田の再生とビオトープ化

蒲原野での湿地性植樹

新城設楽

生態系
ネットワーク
協議会

ともに調和して生きる

森・生きもの・人が

豊かな自然に恵まれて

Shinshiro - Shitara

新城市、設楽町、東栄町、豊根村

新城設楽生態系ネットワーク協議会は平成25年10月に設立。18団体(平成28年10月現在)が、豊かな森林資源を生かして活動しています。林業の衰退や人口減少など課題があるなかで、地域活性化に向けて“市民をつなぐ”活動を展開しています。

本文中、※のついた用語の解説は、P24にあります。

協議会テーマ

樹を活かす、地域を活かす、森のちからと人の営みが調和する奥三河



スギ ヒノキの人工林

森のちからと人の営みの調和を目指して

新城設楽エリアは豊かな森林資源に恵まれています。その約8割がスギやヒノキの人工林であり、林業の低迷により管理の遅れているところもあります。「花祭り」などの独自の文化が根付く地域である一方で、特に山間地域で人口減少や高齢化が進んでいます。

功刀由紀子会長(愛知大学教授)は「さまざまな課題を抱えつつも、豊かな森林資源を生かして地域を活性化したいです。木の駅プロジェクト※12に始まり、植樹やフォーラム、イベントなど活動の幅を広げています」と語ります。



「木育」として行う積み木イベント

樹に触れて楽しみながら生物多様性を学ぶ

「植樹では、皆伐※13を行った後の土地に広葉樹を植えています。戦後に国策でスギなどの針葉樹が植えられ、花や木の実を食べられなくなった生きものが畑に現れて獣害※14が発生するようになりました。花や木の実のなる広葉樹を植えることで、生きものと共存したい。でも木が育つには長い年月がかかります」(功刀会長)。

同協議会が木育※15として行っている間伐材の積み木のイベントでは、子どもたちは積み木で遊びながら環境の大切さを学んでいます。大人もヒノキなどの香りに癒されるそうです。



学生の視点が生きたる「自然観察ガイドマップ」

若者や他の協議会とのネットワークも広げるために

同協議会は愛知大学が事務局を務めていることもあり、いかに若者に参加してもらうかに心を配っています。「最近の大学生は環境に関する知識を持っているので、ぜひ興味を持ったことに取り組んでみてほしいですね」(功刀会長)。同協議会と愛知大学の学生が作成した奥三河の自然観察ガイドマップ『新城・設楽 自然の世界に出かけよう!』では、学生ならではの視点で奥三河の生きものや自然がいきいきと紹介されています。

「今後は他の協議会とも交流したいです。データベースで県内の情報を共有することも必要ではないでしょうか」(功刀会長)。



植樹の様子

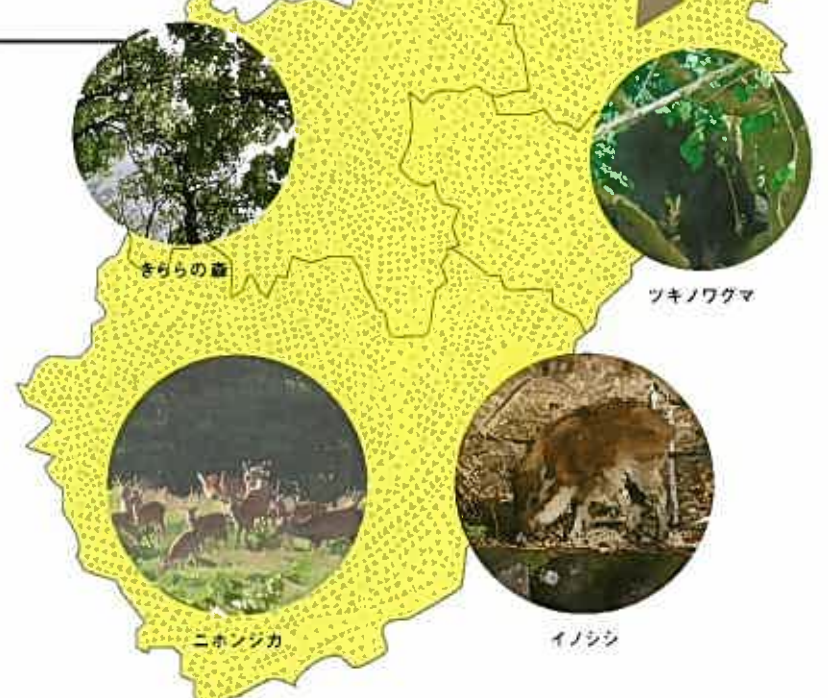
将来の森林に想いを馳せながら、さまざまな人々と活動したい

同協議会では環境の専門家のほかに、専門家ではない人々も多く活動しています。「観光など、環境の専門家ではないからこそできることもたくさんあります。協議会は一般市民を主体にした共同体が望ましい。それにはさまざまな人々の情報や活動を共有していくことが大切です」(功刀会長)。

2020年が近づいてきた今、功刀会長は「あいち生物多様性戦略2020」の先が気になるそうです。「ただ、これまでに植えた樹木はその先も残るでしょう。10年、20年経ったときに奥三河にどんな森ができていくのか、とても楽しみです」と期待しています。

シンボルとなる生きもの

森林(スギやヒノキなどの人工林、広葉樹林)、シカ、クマ、イノシシ



フォーラム



花祭り

おもな活動

- ・イベント出展
- ・積み木貸し出し事業
- ・県民による植樹バスツアー
- ・新城設楽生態系ネットワーク形成フォーラム

東三河

生態系ネットワーク協議会

穂の国の豊かな
生きものと人を
次世代につなぐ



豊川河畔のヨシ群落

自然の手入れだけでなく、
自然をつくることも大切

東三河エリアはムササビが生息する里山があり、三河湾には渡り鳥の大切な中継地である汐川干潟などがあります。三河湾の竹島には自然林が残り、表浜海岸ではアカウミガメが上陸・産卵します。梶野保光会長（東三河自然観察会理事）は、次のように語っています。「自然に任せてはだめで、人の手が入らなければ生態系※7は保てません。また保全だけではなく、ビオトープ※2などの自然の創出も大切です。愛知大学の豊橋キャンパスなど学校にビオトープをつくっているのもこのエリアの特徴です」。

Higashi - Mikawa

豊橋市、豊川市、蒲郡市

東三河生態系ネットワーク協議会は、平成26年2月に設立され、本格的なフォーラムやツアーを積極的に企画・開催しています。自然の保全・創出を通じて生きものをつなげるだけでなく、人や次世代へのつながりも大切に育んでいます。

本文中、※のついた用語の解説は、P24にあります。

協議会テーマ

穂の国いきものがたり
子どもたちへ
水と緑でつなげよう



自然観察バスツアー（水質調査）

親子ともに楽しく学べる
フォーラムやツアーを企画

同協議会は24団体が所属（平成28年10月現在）。年に1回、市民を対象に「東三河生態系ネットワークフォーラム」を開催しています。毎回、要旨集を発行しており、熱心に取り組んでいます。平成28年のフォーラムでは一般市民約140人が集い、生態系ネットワークについて学び、地元の高校生や大学生、NPO法人が口頭発表やポスター発表を通じて普段の活動について語りました。

同フォーラムのほかにも、親子向けの環境学習ツアーを開催しています。ツアーの参加者は、豊川の水質調査などを体験し、身近な自然から生きものつながりについて楽しく学んでいます。



シンボルとなる生きもの

【海】スナメリ、アカウミガメ
【川・池】ヨシ、トンボ
【森】シイ・カシ林、アオバズク



汐川干潟



水辺の生きもの調査
(NPO) 朝倉川水フォーラム



フォーラム（基調講演）

若い世代にも魅力的な
協議会の活動とは？

同協議会内のチームワークは良く、和気あいあいとした雰囲気です。しかしメンバーの高齢化が進み、地元の青年会議所などの協力はあるものの、若い人に参加してもらおうことが大きなテーマとなっています。「現在、豊橋技術科学大学のような地域に根付いた大学が中心となって高校と連携してくれていますが、さらに協議会の活動まで連携が広がるといいですね。そのために、若い世代にも魅力的なフォーラムや活動になるよう、工夫を重ねたいと思います」（梶野会長）。



ふるさと公園で竹林間伐体験
ほの国自然ソムリエ工学校

人と人とのつながり、次世代への
つながりを広げたい

干潟や浅場※16の生物多様性保全※17や再生、里山や河畔林※18の保全・再生により、生態系ネットワークの大動脈である河川の保全と質の向上を目指す山と海をつなぐ活動など、今後も同協議会はメンバーの団体と連携して取り組んでいきます。また、東三河は母なる川、豊川の恩恵を隣接の新城設楽や渥美半島と同様受けているので、今後も連携していきたいそうです。東三河地域には「ほの国自然ソムリエ工学校」のようなリーダー育成の場や、地元の大学との交流の機会が多くあります。子どもたちがやがて活動のリーダーになり、次の世代に水や緑をつないでいく。穂の国の子どもの成長に注目が集まりそうです。

おもな活動

- ・里山に侵入する「モウソウチク」の除伐と竹林の健全化活動
- ・葦毛湿原などの湿原保全活動
- ・フォーラムの開催
- ・環境学習ツアー

渥美半島

生態系ネットワーク協議会

豊かな自然をフルに生かして地域の発展へ



渥美半島の自然(田原市提供)

自然の保全はもちろん、地域の発展のために適切に利用する

海あり山ありの豊かな自然に囲まれた渥美半島。広大な汐川干潟をはじめとして、シギ・チドリ類などの渡り鳥の中継地、アカウミガメの産卵の上陸・産卵地でもあります。また、渥美半島の先端部では「自然の再生」をテーマに、この地域固有の海浜性の植生を復元する公園整備(愛称「いらごさららパーク」)が進められています。後藤尚弘会長(豊橋技術科学大学准教授)は次のように語っています。「自然の恵みを生かした農業や水産業も盛んであり、地域資源の保全や適切な利用は渥美半島の発展に欠かせません。協議会としても、生きものの生息環境を保全・再生するだけでなく、自然の恵みを観光産業などにフルに生かしたいと思っています」。

Atsumi Peninsula

豊橋市、田原市

渥美半島生態系ネットワーク協議会は平成27年1月に設立。多くのNPOや事業者などが参加し、36団体(平成28年10月現在)が活動しています。豊かな自然の恵みを保全・再生するとともに、積極的に利用していく姿勢が特徴的です。

本文中、※のついた用語の解説は、P24にあります。



ハギクソフ



アサリ



オオタカ



アカウミガメ



伊良湖岬自然学習ハスツアー

専門家が丁寧に教えるエコツアーや自然学習会が魅力

同協議会は、一般市民を対象にしたエコツアー※19や自然学習会を企画・開催しています。平成28年9月に開催したエコツアーでは、伊良湖岬の植物について、NPOの専門家が現地ですら丁寧に紹介し、参加者は植物の種類の豊富さを改めて感じたそうです。

また、平成27年7月に開催したフォーラムには一般市民150人が参加しました。愛知学泉大学の矢部隆教授による渥美半島のユニークな動物についての講演や、団体による活動報告、協議会の方向性についての意見交換など、フォーラムは盛況に終わりました。



「環境ボランティアアサークル亀の子隊」のタッチングプール

幅広い年代や他の協議会とつながりを広げていきたい

協議会の取組を長く続けていくために、地元の様々な世代の人たちに生物多様性保全※17に関心を持ってもらいたいそうです。渥美半島には「亀の子隊」など若者向けの活動もあるので、期待が持てます。また、同協議会にはNPOが多く、NPO同士、NPOと行政がお互いに理解し、尊重し、連携することが活動の継続のポイントだそうです。

他の協議会との連携はまだこれからですが、近隣の協議会とは設立の際に協働しているので連絡がスムーズで、他の協議会のフォーラムにも参加しています。

協議会テーマ
海と大地の恵みを活かし、人と自然を未来につなぐ渥美半島の創造

シンボルとなる生きもの

海浜植物(クロマツ、ハマボウフウなど)、アカウミガメ、ゲンジボタル、タカ、シデコブシ、カスミサンショウウオ



キャベツ畑



いらごさららパーク

おもな活動

- ・表浜海岸における生物保全対策の推進
- ・三河湾での干潟、浅場、藻場の保全と再生
- ・農地での生物多様性保全の推進
- ・花咲く砂丘の丘
- ・岸森や防潮・防風林の保全・再生
- ・渥美産食材を用いた食の提供



免々の田川のホタル乱舞

9つの協議会がそろった今、ネットワークに必要な仕組みとは

後藤会長は「これからもさまざまな人に、豊かな生物多様性※1が残る渥美半島を知ってもらいたいですね。一方で外来種※3の問題などにも取り組んでいきたいです」と今後を展望しています。

また、「協議会の目指すところは、県内の生態系※7や人をつなぐこと、つまり一般市民、企業、団体の取組の相談窓口になることだと思います。そのためには各協議会が地域で機能するとともに、9つの事務局をまとめることが必要ではないでしょうか。9つの協議会すべてが設立された今、改めて協議会の役割や仕組みを愛知県とともに話し合う時期ではないでしょうか」と提言しています。

とらえ活動をつなぐ
生きものや自然を
広い視野から



一色干潟

干潟や川を中心に自然や生きもの・人をつなぐ

このエリアは広大な一色干潟をはじめ良質な干潟が数多く分布し、底生動物※20が豊かで、シギ・チドリ類の中継地になっています。

同協議会の片山幸士会長（人間環境大学名誉教授）は「所属団体の取組はさまざまです。協議会の役割は、皆が手をとりあって同じ方向に進むことのできるよう、連携の橋渡しすることではないでしょうか。設立から日が浅いので、まずはエリア内の人をつなぎたいです」と思いを語っています。

South Nishi-mikawa

碧南市、西尾市、高浜市

西三河南部生態系ネットワーク協議会は、平成28年2月に設立されました。27団体（平成28年10月現在）で、干潟の保全・再生をはじめとして地域の生きものの生息環境の維持などを目的に活動を計画し、実際に生きもの調査や外来種駆除、ビオトープの創出などの取組を始めています。

本文中、※のついた用語の解説は、P24にあります。

協議会テーマ
あお
きらきら光る碧い海
～西三河沿岸が
育む生きものたちの
つながり～



生きもの調査・外来種駆除活動

触る、楽しむ体験が
人々の興味をひきつける

同協議会が平成28年5月に行った「生きもの調査・外来種駆除活動」では、協議会副会長の矢部教授（愛知学泉大学）を講師に、小学生やその保護者、大学生ら約70人が小草池や須美川に入り、どんなカメや生きもののがいるのかを調べ、夜には深篠川に舞うゲンジボタルを観察して身近な自然を体感しました。

また、同年9月に開催した「ビオトープ学習会」には企業関係者を中心に約50人が参加し、ビオトープ※2づくりを体験したり、見学したりしました。近年、生物多様性保全※17活動の一環として、ビオトープの創出が企業から注目されているそうです。



セイタカシギ
◎高橋伸夫

ニホンイシガメ
◎矢部隆

ハマシギ(群れ)
◎杉山時雄



ビオトープ学習会

若い世代をよびこむため、
イベントに工夫を凝らす

この地域は、自然環境に対する取組が始まったばかりで、比較的若い会員が多いのが特徴です。引き続き、若い世代にいかにつないでいくかを考えていく必要があります。「知多半島の協議会のように、若い世代を巻き込んで、活動をうまく情報発信していきたいですね。当協議会のイベントは一般市民対象ではありますが、子どもや学生向け、企業向けと対象を明確にして、開催日時や内容を企画しています」（片山会長）。

また、西三河南部エリアは、アサリなどの沿岸漁業や養鰻業が盛んな地域でもあり、生きものとの保全とともに漁業にも今後配慮していく必要があります。

さまざまな生きもの・自然をテーマに
広域を横につないでいきたい

愛知県内に9つの協議会が設立されたことについて、片山会長は「まずは愛知県内の生態系ネットワークに『縦串をさした』点で評価されるでしょう」としています。一方で、「例えば外来種※3について、ある協議会では問題になっているとしても、全域ではどうなのだろうか」と考えることも必要です。川の生きものについても、そのエリアだけでなく流域全体でとらえることが大切でしょう。生物多様性※1をさまざまな切り口で県全域を見る、つまり『横串をさす』ことが今後重要になるのではないでしょうか」と指摘しています。

シンボルとなる生きもの

ハマシギ、セイタカシギ、
ゲンジボタル、ヘイケボタル、
ニホンイシガメ



生きもの調査・外来種駆除活動

おもな活動

- ・生きもの調査・外来種駆除活動
- ・フォーラム等による普及啓発
- ・三河湾での干潟・浅場・藻場の保全と再生・普及啓発
- ・企業緑地等のビオトープ化
- ・矢作川・矢作古川を中心とした河川生態系の保全と再生・普及啓発

尾張西部

生態系ネットワーク協議会

築いてきた人と 自然の共生の歴史を 未来へつなげる

West Owari

名古屋市、一宮市、津島市、江南市、稲沢市、岩倉市、愛西市、清須市、北名古屋市、弥富市、あま市、豊山町、大口町、扶桑町、大治町、蟹江町、飛鳥村

平成28年11月22日設立。これで「あいち生物多様性戦略2020」が掲げた県内9地域全てで協議会が立ち上がりました。同協議会は、会員45団体で、今後さまざまな活動を展開していきます。

本文中、※のついた用語の解説は、P24にあります。

協議会テーマ
サギやケリの舞う生命豊かな尾張平野をめざして

シンボルとなる生きもの

ナゴヤダルマガエル、サギ、ケリ



ハス田



島畑の景観（一宮市健康づくり課提供）

県内最大の水田地帯で島畑が見られる貴重な地域

尾張西部地区はもともと木曾川の派川によって形成された三角州で、江戸時代に「御困堤」が築かれたことで用水を中心とした農業地帯となりました。氾濫や大型台風の被害の歴史を乗り越え、現在も日光川、庄内川をはじめ多くの河川や農業水路が流れる、県内最大の水田地帯が広がっています。特に、水田の所々に盛り上げられた畑は「島畑」と呼ばれ、世界で日本にしかなく、今でも大規模に残されているのはこの地域だけです。また稲沢市には、河川の砂によってできる「河川砂丘」があり、日本では木曾川と利根川でしか見ることのできない風景が広がっています。柔らかな砂のおかげで扶桑町などの扇状地の畑では、世界一長い守口大根がつけられ、豊かな食文化を支えています。



五桑川

気軽で楽しく取り組める活動を積み重ねたい

同協議会の会長に就任した長谷川明子氏（ビオトープ・ネットワーク中部会長）は「水田は生物や環境、また景観的にもとても大切なものです」とし、水田生態系※11の保全・再生に向けて意欲をみせています。

協議会の活動方針としては、例えば、「地域の人たちが在来植物の種取りや植えるなど植物の成長を楽しみながら気軽に取り組めるものが理想的です」（長谷川会長）。それは「気軽で楽しくなければ活動は継続しにくい」ためです。日本の課題として生物多様性※1や生態系への関心度の低さが挙げられていますが、同協議会では地域住民が参加しやすい活動を展開することで、解消につなげたいとしています。



岩倉市自然生体園

小さな一つのアクションが違う形でいってくる

参加者の地域住民や企業の方々に田んぼの群などに生育する地域在来の花の種などを配り、プランターで育ててもらおうといった「小さいながらも一つでもアクションを起こしてもらおうこと」も目的の一つにしていく考えです。植物の種をまくというアクションは、例えば、ビオトープ※2を整備したい企業が現れた場合、地域の種で育てた植物をそこに植えるという流れへの発展が期待できます。

このように地域全体が植物のストックヤードとなり、必要なところに供給できる仕組みを構築していけたらと考えています。そのためにはこれからの未来を支えるユースの力も不可欠ですから、地域の学校とも一緒になって活動していく考えです。



チヨウサギ

“ほんのちよっとの一步”と一緒に取り組みたい

協議会の活動テーマにサギやケリという鳥の名称を入れたのは、「目にする機会の少ない絶滅危惧種よりも、地域の人々が普段から目にしたり、鳴き声を聞くことができる鳥のほうが保全を意識してもらえることに狙いがあります。普通種が当たり前で生息・生育できる環境づくりから始めたい」（長谷川会長）。

このテーマ設定からも分かるように、同協議会は日常的な生活や簡単なアクションから、生物多様性の保全をしていくことを目指しています。長谷川会長は、他の協議会とも積極的に連携しながら「ほんのちよっとの一步」を皆さんと一緒に取り組んでいきたい」と笑顔で今後の豊富を語ります。

おもな活動分野

- ・水田生態系の保全・再生
- ・河川生態系の保全・再生
- ・都市生態系の創出・改良
- ・希少種の保護
- ・侵略的外来種の防除

知多半島

Chita Peninsula

<https://chita-eco.jimdo.com/>

大学等3、企業等14、NPO等8、行政機関11

日本福祉大学、大同大学、中部大学

(株)IHI 愛知事業所、愛知製鋼(株)、出光興産(株)愛知製油所、JXエネルギー(株)知多製造所、新日鐵住金(株)名古屋製鐵所、大同特殊鋼(株)知多工場、(株)豊田自動織機、知多エル・エヌ・ジー(株)、中部電力(株)知多火力発電所、東邦ガス(株)知多製造部、名古屋鉄道(株)、(株)Mizkan Holdings 本社、(株)名鉄インプレス 南知多ビーチランド、(株)LIXIL知多工場

(NPO)愛知生物調査会、板山高根湿地環境ボランティア観察保存会、沓町田湿地を守る会、知多自然観察会、日本エコロジスト支援協会、東浦里山支援隊、美浜町竹林整備事業化協議会、国際ロータリー第2760地区社会奉仕委員会

半田市、常滑市、東海市、大府市、知多市、阿久比町、東浦町、南知多町、美浜町、武豊町、愛知県

東部丘陵

Eastern Hills

大学等23、企業等3、NPO等1、行政機関11

愛知大学、愛知医科大学、愛知学院大学、愛知学泉大学、愛知県立大学、愛知県立芸術大学、愛知工業大学、愛知淑徳大学、金城学院大学、福山女学園大学、中京大学、中部大学、東京大学演習林生態水文学研究所、名古屋大学、名古屋外国語大学、名古屋学院大学、名古屋学芸大学、名古屋工業大学、名古屋産業大学、名古屋商科大学、名古屋市立大学、南山大学、名城大学

三五コーポレーション(株)、生活協同組合コープあいち、東邦ガス(株)

国際ロータリー第2760地区社会奉仕委員会

名古屋市、瀬戸市、春日井市、豊田市、尾張旭市、豊明市、日進市、みよし市、長久手市、東郷町、愛知県

新城設楽

Shinshiro-Shirara

<https://shinshiroshitara-seitaikei.jimdo.com/>

大学等1、企業等4、NPO等8、行政機関5

愛知大学

ガステックサービス(株)(サーラグループ)、(株)システムハウスR&C、中日本高速道路(株)、横浜ゴム(株)

(NPO)てほへ、(NPO)東三河自然観察会、(NPO)穂の国森林探偵事務所、(NPO)穂の国森づくりの会、(NPO)森づくりフォーラム、奥三河自然保護研究会、合同会社新城キッコリーズ、(一社)奥三河ビジョンフォーラム

新城市、設楽町、東栄町、豊根村、愛知県

渥美半島

Atsumi Peninsula

<http://atsumieconet.blogspot.jp/>

大学等2、企業等8、NPO等22、農林漁業団体1、行政機関3

愛知大学、豊橋技術科学大学

トヨタ自動車(株)、休暇村伊良湖、中部電力(株)渥美火力発電所、渥美半島観光ビューロー、田原臨海企業懇話会、(一社)田原青年会議所、田原市商工会、渥美商工会

(NPO)渥美半島ハイキングクラブ、(NPO)AKJ環境総合研究所、(NPO)表浜ネットワーク、(NPO)東三河自然観察会、(NPO)ゆずりは学園、アカウミガメを守る会、あかばね塾、渥美半島の里海を美しくする会、環境ボランティアサークル亀の子隊、汐川干潟を守る会、スナメリくらぶ、せせらぎの会、たはら里山の会、たらめ会、地域自給SATOYAMA、三河生物同好会、日本スバルティナ防除ネットワーク、東三河野鳥同好会、免々田川を守る会、田原市地域コミュニティ連合会、田原区、田原市小中学校長会

愛知みなみ農業協同組合

豊橋市、田原市、愛知県

西三河

Nishi-Mikawa

大学等5、企業等6、NPO等9、農林漁業団体2、行政機関7

中部大学、名古屋大学、愛知学泉大学、愛知工業大学、愛知教育大学

トヨタ自動車(株)、中日本高速道路(株)、ソニーグローバルマニュファクチャリング&オペレーションズ(株)幸田サイト、生活協同組合コープあいち、三五コーポレーション(株)、トヨタ車体(株)

(NPO)おかげ環境教育フォーラム・わかか、ピオトップネットワーク中部、名豊エコロードを推進する会、国際ロータリー第2760地区社会奉仕委員会、(NPO)愛知生物調査会、(公財)日本野鳥の会、(NPO)日本ピオトップ協会、琴平ふくろう谷の会、(NPO)アースワーカーエナジー

あいち豊田農業協同組合、豊田森林組合

岡崎市、刈谷市、豊田市、安城市、知立市、幸田町、愛知県

尾張北部

North Owari

大学等3、企業等3、NPO等5、行政機関5

中部大学、名古屋経済大学、(公財)日本モンキーセンター

徳倉建設(株)、中日本高速道路(株)、犬山市アメニティ協会

(NPO)大山里山学研究所、(NPO)海上の森の会、愛知・雑木林連絡会、みろく山麓の自然を守る会、(NPO)グランドワーク東海

瀬戸市、春日井市、犬山市、小牧市、愛知県

西三河南部

South Nishi-Mikawa

<http://www.nishimikawa-seitaikei.com/>

大学等3、企業等10、NPO等6、農林漁業団体4、行政機関4

人間環境大学、愛知学泉大学、西尾市立室場小学校

(株)あいや、(株)エムアイシーグループ、(株)オティックス、(株)おとうふ工房いしかわ、山旺建設(株)、七福醸造(株)、トヨタ自動車(株)、(株)豊田自動織機、日新製鋼(株)衣浦製造所、日東醸造(株)

(NPO)愛知生物調査会、(NPO)フロンティア西尾、西三河自然観察会、西三河野鳥の会、へきなん市民環境会議、渡し場かもめ会

あいち中央農業組合、東幡豆漁業協同組合、西三河漁業協同組合、衣崎漁業協同組合

碧南市、西尾市、高浜市、愛知県

東三河

Higoshi-Mikawa

<https://higashimikawa-seitaikei.jimdo.com/>

大学等5、企業等4、NPO等10、行政機関5

愛知大学、豊橋技術科学大学、愛知工科大学、豊川市施設管理協会(赤塚山公園ぎょぎょランド)、蒲郡市都市施設管理協会(竹島水族館)

東三河懇話会、(公社)豊橋青年会議所、(一社)豊川青年会議所、(一社)蒲郡青年会議所

(NPO)朝倉川育水フォーラム、(NPO)佐奈川の会、(NPO)東三河自然観察会、(NPO)穂の国森づくりの会、530運動環境協議会、さからの森もりクラブ、手取山公園管理協力会、とよかわ里山の会、豊橋自然歩道推進協議会、国際ロータリー第2760地区社会奉仕委員会

豊橋市、豊川市、蒲郡市、愛知県、国土交通省中部地方整備局豊橋河川事務所

生態系ネットワーク協議会

<http://www.pref.aichi.jp/kankyo/sizen-ka/shizen/ecologicalnetwork/index.html>

構 成 団 体
一 覧

平成29年1月28日現在

用語の解説

- ※1 生物多様性 : 種内(遺伝子)、種間、生態系の多様性を示す。
- ※2 ビオトープ : 生物の生息生育空間のこと。日本では「人の手で作られた水辺」のイメージがあるが、本来の意味は水辺だけでなく樹林や草地などの様々な環境が含まれる。また創出した場所だけでなく、本来その場所にある環境も含まれる。
- ※3 外来種 : 自然分布範囲以外の地域または生態系に、人為の結果として持ち込まれた生物のこと。移入種、外来生物と同義。国外だけでなく国内の他地域から持ち込まれたものも含む。
- ※4 在来種 : その土地に従来から生息・生育している固有種等の動植物。
- ※5 エコロジカルコリドー : 野生生物のための回廊(通り道)で、異なる生態系のつながりを示す。
- ※6 抵抗性マツ : 松くい虫被害の原因である線虫「マツノサイセンチュウ」に対して抵抗性のあるマツの品種。
- ※7 生態系 : 食物連鎖などの生物間の相互関係と、生物とそれを取り巻く無機的環境の間の相互関係を総合的にとらえた生物社会のまとまりを示す概念。
- ※8 東海丘陵要素植物群 : 東海地方の固有種や大陸系の種。シデコブシや、シラタマホシクサなど特徴的な植物が15種知られている。
- ※9 ミティゲーション : 開発の際に自然への影響を回避したり緩和したりすること。ミティゲーションは、影響の回避、最小化、代償の順に検討することが重要。
- ※10 コリドー : ヒトの生活圏によって分断された野生生物の生息地間をつなぎ、主に動物種の移動を可能とすることで生物多様性を確保するための植物群落や水域の連なり。
- ※11 水田生態系 : 水田面、水田土壌、あぜ、水田に附帯する用排水路などで構成された環境とそこに依存して生息する生物の集合体。
- ※12 木の駅プロジェクト : 森林整備と地域経済の活性化を目的とした事業。山で放りっぱなしになっている木(林地残材)を「木の駅」に出荷し、町が元気になる仕組み。全国で展開されている。
- ※13 皆伐 : 林業用語。森林などの区画内の樹木を全部、または大部分を伐採すること。
- ※14 獣害 : イノシシやシカ、クマ、サルなどの野生動物による農作物・樹木などへの被害。
- ※15 木育 : 市民や児童の木材に対する親しみや木の文化への理解を深めるため、多様な関係者が連携・協力しながら、材料としての木材の良さやその利用の意義を学ぶことその他の活動。
- ※16 浅場 : 岸の近くや川の瀬などで、水深の浅い場所。
- ※17 生物多様性保全 : 生物多様性とは、種内(遺伝子)、種間、生態系の多様性を示し、生物多様性保全とは、様々な生物が相互の関係を保ちながら、本来の生息・生育環境の中で繁殖を続けている状態を保全することをいう。
- ※18 河畔林 : 河川の周辺に繁茂する森林のこと。
- ※19 エコツアー : 「自然環境や歴史文化を学ぶとともに、それらの保全に責任をもつ観光のあり方=エコツーリズム」の考え方を実践する旅行やプログラム。
- ※20 底生動物 : 水域に生息する生物の中でもゴカイなどのように底質に生息する生物の総称。

あいち生態系 ネットワーク 協議会レポート

平成29年1月発行

発行 : 愛知県環境部自然環境課

住所 : 〒460-8501

愛知県名古屋市中区

三の丸三丁目1番2号

TEL : 052-954-6229

FAX : 052-963-3526